

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（第5回）の概要

1 日 時 平成27年8月26日（水）9：00～12：00

2 場 所 かでる2・7 1040会議室

3 出席者 別添出席者名簿のとおり

4 挨拶 道農政部生産振興局農産振興課長より挨拶

5 議 題

○ 生食・加工用検討会（9：00～10：30）

（1）北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会設置要領の改正について
資料1に基づき事務局から説明

（2）ジャガイモシロシストセンチュウの確認について
資料2に基づき事務局から説明

（3）ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に向けた今後の取組（案）
資料3に基づき事務局から説明

（4）意見交換
別添のとおり

○ でん粉用検討会（10：30～12：00）

（1）北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会設置要領の改正について
資料1に基づき事務局から説明

（2）ジャガイモシロシストセンチュウの確認について
資料2に基づき事務局から説明

（3）ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に向けた今後の取組（案）
資料3に基づき事務局から説明

（4）意見交換
別添のとおり

出席者名簿

<生産者団体>

氏名	所属・役職等	生食加工	でん粉
下出 雅佳	北海道農業協同組合中央会 畑作農業課 課長	○	○
藤井 正樹	ホクレン農業協同組合連合会 種苗課 課長	○	○
澤岡 浩幸	ホクレン農業協同組合連合会 種苗課 課長代理	○	○
中村 匡晴	ホクレン農業協同組合連合会 玉ねぎ馬鈴しょ課 調査役 ※高橋 克典玉ねぎ馬鈴しょ課課長の代理出席	○	
山本 淳一	ホクレン農業協同組合連合会 でん粉課 課長		○
上田 裕之	十勝農業協同組合連合会 農産課 課長	○	○
仲野 貴之	士幌町農業協同組合 農産部農産課 課長	○	○
松山 丈晴	ようてい農業協同組合 営農経済事業本部営農推進課 課長	○	○
小野 丈夫	斜里町農業協同組合 営農部 部長	○	○
遠藤 充	斜里町農業協同組合 営農部 営農振興課長	○	○
上野 隆	小清水町農業協同組合 営農部 部長	○	○

<試験研究機関>

田宮 誠司	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 畑作研究領域 上席研究員	○	○
大波 正寿	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部北見農業試験場 主査(馬鈴しょ)	○	○
川口 武泰	ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所 作物生産研究室 畑作物開発課 課長	○	○

<試験研究機関>

三澤 孝	独立行政法人種苗管理センター 北海道中央農場 場長	○	○
三浦 義徳	公益財団法人日本特産農作物種苗協会 十勝特産種苗センター 場長	○	○
福田 智史	一般社団法人 北海道消費者協会 商品テストグループ 主任技師	○	
松井 正広	生活協同組合コープさっぽろ 生鮮本部農産部 バイヤー	○	
近藤 和仁	日本スナック・シリアルフーズ協会 カルビー株式会社 馬鈴薯調達課 課長 ※ 植村 弘之カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所所長の代理出席	○	
久郷 真司	サンマルコ食品株式会社 リスクマネジメント本部 部長	○	
三宅 秀明	公益社団法人北海道馬鈴しょ生産安定基金協会 専務 ※小山 雅裕事務局長の代理出席		○

<行政>

大塚 真一	北海道農政部生産振興局技術普及課 主幹(研究連携)	○	○
中兼 正次	北海道農政部生産振興局技術普及課 主査(農薬・植物防疫)	○	○
片山 正寿	北海道農政部生産振興局技術普及課 主査(普及指導)	○	○
白旗 哲史	北海道農政部生産振興局農産振興課 課長	○	○
月岡 直明	北海道農政部生産振興局農産振興課 主幹(畑作企画)	○	○
森澤 美佳	北海道農政部生産振興局農産振興課 主査(てん菜馬鈴しょ)	○	○

<オブザーバー>

三浦 保	農林水産省北海道農政事務所 農政推進課 課長補佐	○	○
------	--------------------------	---	---

北海道産馬鈴しよの安定供給に関する検討会（生食・加工用）の意見交換概要

- 1 日 時 平成27年8月26日（水）9：00～10：30
- 2 場 所 かでる2・7 1040会議室
- 3 意見交換（主な発言内容）

○ 生産者団体

- ・ 当管内では、男爵薯を主力として、キタアカリ、とうや、きたかむいを、品種特性も考え合わせた上でリレー出荷をしているところ。
- ・ キタアカリは育成から20年以上経過しているが、今でもなかなか認知、消費が拡大されていかないという経過もあり、現況では面積が減少。
- ・ ここ4～5年、きたかむいを導入してきているが、こちらも消費者の認知度がなかなか上がらない。道外の量販店とも連携しながら、時期を絞った中で取り組みを進めている。
- ・ 抵抗性品種については、課題にもあるように、ロットが少ない中でPRをいかに進めていくか、時期、相手先を絞って取り組んでいくのが良いのかなと進めているところ。
- ・ 販売面での課題は認知不足、生産面では、特にきたかむいで、芽が少ないため種馬鈴しよの生産性が伴わないことが課題。

○ 生産者団体

- ・ 前回も話したが、抵抗性品種の導入は、ジャガイモシストセンチュウ（以下「Gr」という。）対策の一部にしかない。導入は大事だが、土壌の移動等基本的な対策がまずあるべきだろうと考えている。生食加工用、でん粉用を問わず、基本的な対策は一緒。この検討会が用途によって分かれていることに違和感を感じている。
- ・ 抵抗性品種の導入は進めていかなければならない。今回、ジャガイモシロシストセンチュウ（以下「Gp」という。）が発生したということで、やはり抵抗性品種だけでは限界があると痛感した。
- ・ 当管内で一番初めに入れた抵抗性品種はきたひめというチップ用の品種で、平成16年に導入し今は完全に主力の品種になっている。栽培技術確立まで年数は相当かかっており、種苗の供給も本格的な面積が出てくるまでには、5年、10年という長い期間がかかる。
- ・ 生食用については、新品種は名前が売れていないので爆発的な人気は難しい。かなり我慢をしなければならない。
- ・ 場合によっては、作っても売れないということも覚悟した上で、産地は取り組まなければならない。それでも入れていかなければいけないという産地の強い意志が必要と思う。だが、そうすると収入補償など金銭的に相当なサポートが必要。売れなかった場合、原料をどう処分するかということもある。地道に我慢強く進めていかなければならない。
- ・ 今後、産地、系統、農協のサポート、行政の支援もいただきながら産地として抵抗性品種を入れていかなければいけないという強いアピールが今求められているのではないかと感じている。

○ 生産者団体

- ・ シスト対策にはいろいろあるが、トータルなまん延防止対策が大前提。整理して取り組むべき。
- ・ 品種転換では、種苗の供給もあるし、新しい品種が普及するまでのリスクを誰が取

るかという問題が大きい。産地側として共有して生産していくという意思が大事だろうし、メーカー、量販店の方々もこの事実を認知いただいて積極的に試していただく。そういうところから始めるしかないのではないか。

- ・ 産地として実際に売買してお金を動かす計算をきちんとして、リスクを取って取り組むという覚悟を持った上で進めていく必要があるのでは、

○ 加工団体・企業

- ・ 我々は農協から男爵薯を購入しているが、基本的には一つの品種ということで生産している。商品の食味の安定という面では品種を一つに絞るとするのがコントロールしやすい。量の面からも男爵薯を使っている。
- ・ 原料の安定供給という意味では、男爵薯に頼らざるを得ないという状況。抵抗性品種ということで、キタアカリ、きたかむいを使った商品もお客様へ紹介しているが、きたかむいは通年使って商品を供給することができないので、時期を限定してお客様に案内をしている。
- ・ 加工用なので、生食用として生産されたものから供給いただく。生食用の生産量に合わせて出てくるものをこの先も使っていかなければいけないという意味では、生産の現状に合わせて流動的に対応するという形になるかなと考えている。

○ 加工団体・企業

- ・ チップ用は、乱暴な言い方をしてしまうと、製品さえできれば、カラーさえ良ければ良い。抵抗性品種かどうかということとは関係ない。替わる品種がないので使っていない。実際、品種名を出していないので、何の品種でも使える。
- ・ 昨年、キタアカリの名前を出して使ったことがあるが、キタアカリは、我々が購入する仕組みと異なるため、価格が高いのであまり買いたくないというのが正直なところ。買い方の仕組みの違いから生食用抵抗性品種は買いにくいということはある。
- ・ スナック菓子では、基本的にサラダ化して使うので、実は何でも使える。昨年発言させていただいたが、でん粉用品種でもこの商品は作れる。なので、でん粉用抵抗性品種を供給していただければ、テストを経た上でではあるが、使えることもある。
- ・ 今はトヨシロをメインに使っているが、これは導入当時からトヨシロだったので、今はトヨシロでないと作れないということになっているが、抵抗性品種でやるんだということになれば、そういうテストも行う。

○ 流通団体・企業

- ・ 店舗で販売していく上で、男爵薯、メークイン、キタアカリは、置いておくだけで一定量売れていく。その他品種はなかなか売れていかないというのが現状。品種がたくさんあるので、どれが良いか販売していく店側としても知識がないので拮がっていない。時間がかかるし、店舗での勉強ももっとしていかないと考えている。

○ 生産者団体

- ・ 産地としては作らなければいけない必要性はわかっているが、売っていただく側は昔からある品種にやっとキタアカリが認知されてきているという状況。量販店ではいもを売るスペースが限られた中でどれをどのように売っていくかという話になってくると思う。
- ・ 道外のお客さんに新しい品種の提案やテストなどを勧めてはいるが、簡単にはいかないと感じているところ。

○ 生産者団体

- ・ 生食加工用の難しさは、**正**品は一定の価格で出さなければならず、小玉、傷品も加工用としてお金に替えて流通させていかなければならないというところ。
- ・ 今の抵抗性品種は黄色系が多いが、コロッケ、サラダでは白系がメインだということがある。ここを解決できる仕組みがセットでないと難しい。
- ・ 男爵薯に似たホクホク感、メイクインに似た〇〇というPRが多いが、似ているだけでアピールになるのか。男爵薯以上にホクホクしたとか、または、作る側から言わせれば収量が上がるとかがあると良い。
- ・ 今以上の品種が出てきてくれることが望ましいと感じている。特にチップ原料用が足りないという現状を打破しなければいけない。
- ・ 作付面積が増えないので、限られた面積の中でどう量を確認していくかということセットで考える必要がある。

○ 流通団体・企業

- ・ なじみのない品種を販売するに当たり、POPで特徴を説明する文言としては、流通量の多い男爵薯、メイクイン、キタアカリに例えた表現がお客さんには伝わりやすいと思う。お店の人間がわかっていないとPOPも書けないので売る側への情報提供も必要。

○ 試験研究機関

- ・ Gr発生当時は抵抗性を導入することがメインで、既存品種と同等でも抵抗性品種ということで育種してきた。最近は抵抗性は当たり前で、既存品種よりも収量性が高い、目が浅い、皮がむきやすいというところを目指している。

○ 試験研究機関

- ・ 最近出ている品種は男爵薯よりおいしいと思うが、求められているものが男爵薯よりおいしいものなのか同等のものなのかというところが問題。
- ・ ロットがあるから男爵薯を使っているという方には男爵薯同等で収量性の良い品種ですよという戦略。男爵薯の味を求めている方には現段階では難しい。
- ・ 当機関が平成16年に育成したスノーマーチが19年から農協で栽培されている。23~24年はクレームが多かったが26年位からはクレームがなくなってきた。一定期間クレームに耐えるためには、男爵薯と同じという宣伝文句ではつらい。
- ・ どういう方にメリットを活かせる品種が打ち出せるかと考えながら品種開発を進めているところ。

○ 試験研究機関

- ・ 抵抗性品種は既存の主力品種からの置きかえを目標に育種している。
- ・ 抵抗性品種として、油加工用のきたひめを出し、でん原用のコナヒメを試験中。加工用、でん粉用では既存品種を上回る点もアピールしやすいし拮がりやすい。
- ・ 生食用は試験機関が全ての特性を調べて既存品種並み、且ついくつかの特性で上回るというものを出しても拮げていくのは難しい。
- ・ 私どもとしても既存の大ロット品種をまず売って行かなければならないという使命もありジレンマを感じているところ。
- ・ こういった会議の場で、いつごろまでにどれくらい増やさなければならぬと共有するのは意味があるのかなと考えている。

○ 北海道

- ・ 品質を伝える時に食味の数値化、見える化はできるか。

○ 試験研究機関

- ・ 人によってほくほく系が好きな人としっとり系が好きな人がいる。米のたんぱく含量のような単一の指標は難しい。
- ・ 今は人手をかけて官能検査をしているが、そのデータと何らかの数値の相関を取るといってもなかなか難しいのでは。男爵薯に近い方が良いのかどうか。いもの風味がある方がいいという人もないほうがいいという人もいて好みが分かれる。

○ 関係機関

- ・ 新品種の普及への種子供給で協力させていただいている。
- ・ Grは人体には影響がないため、作る人も食べる人も困っていないのではという疑問を感じている。抵抗性品種が普及していかないのは、経営が成り立っているから。そこを誰が危険をかけてやるかというところをもっと真剣に議論しないと。各自お任せですよとしていると今のままなのではないかという疑問がある。

○ 関係機関

- ・ 今年度も新品種候補の試験をしている。年々品種数が増え、今年は80を越えている。先を見越して作らなければいけないという難しさがある。品種数を整理していただけるとありがたい。

○ 生産者団体

- ・ 全国的に品種の認知を進めていかないと置きかわっていかない。例えばスノーマーチを仮に府県で作って、出荷時期が異なれば、認知度は上がる。道だけの品種と捉えるのではなく、広い意味でやっていかないとだめかなと思う。
- ・ 先ほど困っていないという話があったが、種馬鈴しょとしてはかなり困っている。種馬鈴しょ戸数は減ってきており、5,000ha越えの面積を1,500戸で生産している。
- ・ 今までどおりやっていけるかどうか。品種数も増え、必ずしも作りやすいわけではなく、ある意味チャレンジをしていただきながら、種馬鈴しょ生産者には産地の求める品種を作っている。最初にリスクをとるのは種いも生産者。
- ・ 種苗管理センターも大変な思いをされているので、もう少し予算が入っていくという思いはある。
- ・ おいしさは、男女、年齢層によって捉え方が異なる。単においしいもというだけで購入動機につながるか？

○ 北海道

- ・ 新品種の認知度向上とロットの確保が重要。
- ・ 今後の取り組みの一つ目の品種PRは、道としてどこまで効果があるのかということがあるので、もう少し考えなければいけない。種苗生産については数が多すぎるという面があるので、効率化に努めなければならないが、どの品種が良い悪いということを行政が差配すべきではないので、あえてここには書いていない。需給上、結果的に品種が整理されていけば良いのかなという思いもあり、情報共有や今後の生産動向の推移予測をより緊密に行っていく必要があると思う。
- ・ 本当の意味で困っていないのではという話もあったので、枠組みから検討が必要と感じた。
- ・ 二つ目、三つ目はこのとおりの進め、皆さんと情報共有する必要性は感じている。

○ 生産者団体

- ・ 生産者としては、男爵薯、メイクインは、製品も規格外品も売れるから作っている。新しい品種の方が採れるし病気にも強く作りやすいが、生食の部分（製品）しか売れ

ない。だから作らない。

- ・ もし全産地で一気に、男爵薯の替わりはこれだとなれば話は別だが、今のままではなかなか替わらない。どこかが仕切って切り替える必要があるのでは。
- ・ でん粉原料用、加工用は使う側が限られていて切り替えやすい。

○ 加工団体・企業

- ・ 抵抗性品種の普及率 50%という目標は変えるのかそれともそのまま進めていくのか。50%普及させるということであれば我々使う側も替えていかなければならない。そのためにはどこかが率先してやらないといけない。誰がやるのかということはこの場で決めることがこの会の成果なのではないかと思う。

○ 生産者団体

- ・ 34年までにでん粉用は100%置きかえようと決め、産地側もその目標に向かって突き進んでいるところ。

○ 北海道

- ・ 50%は指標であって目標ではない。数字先行ではなく、あくまで取り組みの成果の指標として目指そうということだったはず。
- ・ 抵抗性品種を普及させなければいけないという目標は変えるつもりはないが、具体的方策をどうするかというところが難しい。

○ 生産者団体

- ・ このままだと20年先には馬鈴しょ畑がなくなる恐れもある。やや乱暴だが、スーパー男爵、スーパーメークインのような形で品種を絞り込んでいくという方法もある。

○ 北海道

- ・ 品種を絞り込んで皆で集中的に取り組むということについては、事務局で預からせていただきたい。

○ 関係機関

- ・ 消費者が気にするのは、安全性、品質、価格。抵抗性品種と非抵抗性品種で価格は変わらないのか。

○ 流通団体・企業

- ・ 店頭ではそれほど変わらない。

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（でん粉用）の意見交換概要

1 日 時 平成27年8月26日（水）10:30～12:00

2 場 所 かでる2・7 1040会議室

3 意見交換（主な発言内容）

○ 生産者団体

- ・ 当管内産の種馬鈴しょは全部抵抗性品種に置きかえることができた。
- ・ 種馬鈴しょ農家が作付意欲を失っている。選果施設を建てて、個選から共選にして3年目。その中で今回G pの話が出てしまっていて動揺している。
- ・ 抵抗性品種拡大については、全町的に意識させるような取り組みをしているところ。発生した地域については、発生ほ場を把握するだけではなくG r発生密度をいかに低下させるかを考えている。
- ・ 平成23年からカップ検診をすすめており9割近くの農家が1回は経験している状況。抵抗性品種への意識は高まりつつあるし、アーリースターチの栽培も心得てきたところなので、近年収量が高まってきており期待している。
- ・ 今試験をしている新品種についても順調に推移しており生産者の期待は高い。G pの話がなければもっと作付けについて気持ちが高まる状況になっていただろうという状況。

○ 生産者団体

- ・ 前の団体と同じように抵抗性品種については農協の計画でも平成34年までに全部置きかえると話が進んでいるし、生産者としても抵抗性品種に対する違和感はなくなってきている。逆にコナフブキがだんだん取れなくなってきたということもあり、新しい3品種に期待している。試験でも取れているので問題なく進むだろう。
- ・ 早掘りなどはアーリースターチなど多様になってくるだろうが、多少は品種を絞りながらやっていきたいと考えている。
- ・ G pに関しては、34年までに全部G r抵抗性品種に置きかえていいのかという論議も出ていないわけではないが、とりあえずは34年までに今ある抵抗性品種に置きかえていく。その中で次を考えようと話している。

○ 生産者団体

- ・ でん粉プロジェクトを平成24年から開催しているが、抵抗性品種の普及促進、でん粉原料用は作付面積の100%と設定して協議検討している。
- ・ コナヒメの原原種生産がスタートした。でん粉用については、収量性、早掘り適性等課題はあるが、生産者にとってはでん粉収量が安定して取れるということが一番。そのため、生食加工用とは違って品種移行はしやすい。
- ・ コナユキが普及の段階で安定多収になかなか至らなかったという経過も踏まえ、コナヒメはいろいろな試験を並行しながらデータを集約し、早期に栽培法を確立できるよう、各関係機関と連絡をさせていただきながら進めていく。

○ 生産者団体

- ・ コナヒメについては、全道分一括して当管内の農協で原種を生産。来年も継続する。今年に関しては収量も悪くなさそう。急速に普及していくには種子生産を拡大していくしかないと考えている。
- ・ コナユタカも管内に原種ほを設置しており、配布希望、問い合わせが来ている。

○ 生産者団体

- ・ 新3品種について小さくは試験しているが過去の品種から見ると産地での大型試験ができていないことが心配。小型試験では細かい試験ができていない。導入と同時に現地の大型試験のような形になると、1年目で失敗してしまった場合に生産者の導入意欲が減るので、情報を出してほしい。

○ 関係機関

- ・ 3品種については情報交換を密にさせていただきながら進めている。
- ・ 昨年一部品種で黒あし病の発生があり出荷を見合わせ、北海105号も試験用に出せなかった。ご迷惑をおかけし申し訳なかった。黒あし病についてはしっかりと対応していきたいと考えている。

○ 試験研究機関

- ・ 安定多収に向けた試験を実施。北海105号は熟期が遅いので、早掘りしたときの適性を調べて実際に栽培する時に情報として提供できるようにしたい。
- ・ 予算的には農水省のオンデマンド事業に参加することになったので、来年度もそれぞれ現地試験等を行っていききたいと考えている。

○ 試験研究機関

- ・ コナユタカについては、小プロットの試験と10~20a規模の試験を実施。
- ・ 新品種の増殖は十勝特産種苗センターにお願いして今までよりも早い時期から作れるようになった。しかし、出回る種子が3,000kgしかないので、中規模試験が限界。
- ・ 28年まで当機関から種子を提供して栽培試験を行い、その先も他団体の基金などでもう少し詳しい試験ができればと考えている。現場で大規模試験が始まった後に出てくる課題を解決するためあと3年くらいは必要と考えている。
- ・ オホーツク総合振興局が独自事業を組み立て、27年から31年まで当機関と普及センターで試験栽培に取り組める状況。この流れを受けてコナヒメ、北海105号も試験したいという話が出てくると思われる。

○ 試験研究機関

- ・ コナヒメはコナユタカ、北海105号と足並みをそろえて普及していきたい。昨年地域在来品種の登録を行って、普及に向けた取り組みをしているところ。農協、関係団体にお世話になりながら種いもを増殖して試験しているが限界がある。調査には積極的に協力したい。
- ・ コナヒメ、北海105号、コナユタカの特徴の違いをどこでどう共有して広げていくかということが課題。きちんとしたデータとして皆が認知する場所を作る必要がある。
- ・ コナヒメ単体では今年オホーツク管内の農協にお世話になってラインテストを実施予定。白度がちょっと低いことを懸念しているのでデータを取りたい。

○ 関係機関

- ・ コナユキのやり方がまずかったという反省があるので、普及と試験を並行しつつ、早急に各地区における課題を整理しながら進めてほしい。
- ・ 先ほど他団体からも話があったが、Gpの抵抗性を何とか早期に探し出して皆さんとの協力の中でやっていきたい。

○ 北海道

- ・ 3品種の特性を同じレベルで比較して整理する可能性も試験場であるか。

- 試験研究機関
 - ・ 当機関のは場で一緒に植えていたので、検定試験のデータの比較はできる。

- 試験研究機関
 - ・ 基本的な特性は比較できるが産地が知りたい情報にマッチしているか。どのタイミングで出すか。必要性は感じているがイメージがつかめていない。
 - ・ 現状でいけば、コナヒメは早い時期の使い方、秋小麦の前。コナユタカは熟期が遅い。北海 105 号はもっと遅い。あえて並べる必要性があるかどうかも疑問がある。

- 関係機関
 - ・ これから要望されると思うが、G p 抵抗性の品種の普及がいち早くできるよう道庁にもお願いしたい。

- 試験研究機関
 - ・ G p 抵抗性品種は、ヨーロッパでは育成されているが、今回の G p に合うか試験が必要。現在情報を集めているところ。

- 生産者団体
 - ・ G r 対策としては抵抗性品種に転換していくのが一番だが、強制力、指導力のあるまん延防止対策の徹底を行政主体で行っていただきたい。地域に応じた個別の対応、振興局主体のもう一步突っ込んだ資料、対策に対する支援といったものをもう一度強化していただきたい。

- 北海道
 - ・ できる限りの対策を取りたい。農協との連携が重要。

- 生産者団体
 - ・ 当管内ではでん粉専用品種の他生食加工用の規格外もかなりある。具体的なものはかなり見えてきている。早急に予算措置も含めて動いていただきたいという強い思いがある。
 - ・ G p が出たということを受け、緊急に動かなければいけない。具体的には、土壌移動の防止、各産地の車両洗浄設備の整備、でん粉工場遊離土砂対策、殺菌装置など。
 - ・ G p 抵抗性品種の育成にも早急に着手してもらわないといけない。ふ化促進物質によるは場での防除や殺センチュウ剤の改良等道庁にも主体的に動いていただきたい。
 - ・ 販売促進より先に動かないといけない。今の状況ではまん延防止策が失敗しているといわれてもしょうがない。危機感を持って進めるべき。

- 北海道
 - ・ 重く受け止めて対応したい。

- 生産者団体
 - ・ 我々は組合員に対してしか言えない。一般の会社や、農協組合員でも関係の薄い人には言いづらい。行政が全道を面でやらないといけない。G p 発生を機に、時機を逃さずにやっていただきたい。
 - ・ 40 数年前の失敗がここまで来ている。我々も含めてここでやらないとまずいという雰囲気になっているのでお願いしたい。
 - ・ 既存の取り組みの中で、抵抗性品種に置きかえる。努力されて拡散していない地域も、これから関わっていただくことで、種子産地のリスク、手間を十分把握し、種い

も生産者が前向きに進められるよう対策していただきたい。

○ 生産者団体

- ・ 抵抗性品種に置きかえていくに当たり、種いも生産者が前向きに進められるよう、品種切り換えのリスクや手間を把握し、支援してほしい。

○ 北海道

- ・ 次回以降の検討会では、単なるフォローアップではなく、検討会のあり方も含めて検討し、相談させていただきたい。